

# 近代と都市部落

## — 広島市A町を事例として —

都市社会学研究所 青木秀男

### (一) 都市部落研究の視座

今、近代日本の都市研究が増えている。ポスト近代と称される今日、近代の意味が問われ、解体され、再構築されつつある。都市が脱工業化し、世界都市化するなか、都市の自己史が洗われている。都市は近代の光と影をいかにして継承し、また払拭しつつあるのか。

近代都市の研究の焦点(の一つ)は、都市下層の生成と展開の解明にある。実際、近代都市の主役は、階層・空間としての都市下層であった。ここで都市下層とは、たんに都市の底辺一般を意味しない。それは、近代都市において「収奪」と「被差別」が同時に課せられた階層・空間としての、固有の歴史的範疇である(1)。ではその都市下層は、いかなる意味で近代都市の所産なのか。それは、いかなる軌跡を経て今日に至ったのか。

近代の都市部落の研究もまた、少なくない。前近代を

起源とする部落差別がいかに再定義され、活性化し、近代都市の基底に構造的に組み込まれていったのか。じつに都市部落の研究は、都市下層の生成と展開の解明の鍵(の一つ)をなす。

中川は、東京を事例に、近代の都市下層の生活構造を分析した「中川清、一九八五」。そして都市下層が「貧民」(貧民窟)から「細民」(細民地区)へ、さらに「要保護世帯」へ抽象化し、社会の中流化のなかで不可視化していく過程をあきらかにした。しかしそこで、この抽象化・中流化の全般的過程のなか、「被差別」存在として都市底辺に凝離して今日に至る被差別部落民・在日韓国朝鮮人(以下、韓国朝鮮人)・日雇労働者・野宿者等(の集住地区)にみる、近代都市の二重構造の分析という課題が残された。

杉原等は、大正期の大阪を事例に、日雇労働者、被差別部落民、韓国朝鮮人等の労働生活過程を分析した

「杉原薫・玉井金五、一九八六」。そして「スラム労働力市場」として大阪の商工業化の推力をなしていた被差別民衆の姿をあきらかにした。そのなかで、福原は都市部落住民の被差別労働市場および被差別地区の膨張の動態をあきらかにした「福原宏幸、一九八六、九五―一五九頁」。しかしそこで、近代都市の被差別構造が今日のその原型として継続／断絶していく過程の分析という課題が残された。

近代の都市下層の研究はこの他、社会学・歴史学・文学等の領域からのもの等、枚挙に暇（イトマ）がない。それらはおおむね、近代都市の不可視の断面を暴き、今日の都市下層に連続／断絶する史的原型を模索し、以て近代が胎む自己撞着的な多面性を描く営みとしてあった。近代の都市部落の研究もまた、個別事例の実態調査報告・モノグラフとともに、都市部落の労働・生活・文化の研究、さらに米騒動・災害・疫病等の事象をめぐる都市部落の研究と、枚挙に暇がない。それらはおおむね、都市部落の労働・生活・文化の構造を解明し、以て近代の部落差別の再定義と再生産のメカニズムを暴く営みとしてあった。その上で、近代都市の形成と展開の全体過程に被差別部落（民）の動態を位置づけ、資本の「収奪」および「被差別」という都市形成の二重原理の接合を再

構築する課題が残された（「馬原鉄男、一九七四」「大串夏身、一九八〇」「馬原、一九八二」他）。

本稿は、筆者が参照しえた先行研究の評価を前提に、これに残された課題を進める意図のもと、一つの事例研究を試みる。事例は、広島市の被差別部落・A町である(2)。本稿の課題は次のとおりである。

- 一、近代広島都市および都市下層形成にみるA町の位置と構造（の一断面）を分析する。
- 二、A町（住民）にみる「収奪」と「被差別」のメカニズム（の一断面）を分析する。

以て「都市部落」および「都市下層」範疇の再構築の一助となす。研究の資料は、筆者が収集・参照しえた範囲のA町に関する論文・文献、行政・団体資料、新聞、雑誌、住民聞き取り等からなる。それら資料の質量は、なお少ない。

本論に入るまえに、本稿が留意する方法的な前提について注記する。

- 一、一般に、資料に記された歴史的事実がつねに無謬・正確とは限らない。そこに資料作成者の意図や方法のバイアスが介在するからである。ゆえに資料の

引用（重引）には作成者の意図や方法の考証（資料批判）が前提となる。本稿はこの点を承知している。しかし傍証となるべき資料が少ないなか、資料の周到な考証には限度がある。

二、都市部落の人々は、なにも下層ばかりではない。資本の論理が貫くなか、人々は階層分化し、部落のなかに富裕層や中間層が現れる。ただし本稿は、都市部落の全般的な階層分析に主眼をおくものでない。ただその下層部分に関心を抱く。そして下層の人々を主役とした都市部落の史的展開の主要な特徴の抽出をめざす。この意味で、本稿は都市部落の一断面を見るにすぎない。

三、本稿は近代の都市部落の人口・就労にみる部落差別の構造分析を主題とする。その論証に必要な限り、厳しい部落差別の史実をも引証する。また本稿は、被差別の人々の差別との闘いの軌跡には直接言及できない。しかし厳しい差別があるところ、人間解放を希求する被差別の人々の闘いがある。A町の場合もそうである。この人々の怒りと闘いへの共感、これが本稿の動機である。

## (二) 広島と近代

広島（市、以下同じ）は太田川の三角州に位置し、元来農地が狭小で人口が多い地域であった〔有元正雄他、一九八三、二〇五頁〕。幕末期、商業的農業と貨幣経済が浸透し、農民層分解が進んだ。小規模な地主制のもと過剰人口が生じ、それは伊豫稼ぎ・作州稼ぎとして排出された。明治期、人々は、北九州・岡山・大阪・東京等の炭鉱・紡績工場に出稼ぎに出た。さらに出稼ぎは、時代の潮流のなか、ハワイ↓北米↓南米↓東南アジア↓「満州」と海外に展開した。

一九世紀初頭、広島藩の総村五二二の内、街道・河川筋の二六一村に被差別部落が配置された〔橋本敬一、一九八六、六六頁〕。部落の人々は「革田身分」とされ、おもに「夜警・犯罪人追捕・牢番・刑罰執行」の仕事を担当された〔橋本敬一、一九八六、七五頁〕。この内、広島城下に東西二つの被差別部落が配置された。その西端の部落が今日のA町の起源に当たる。

広島は、農地狭小・人口饒多にして国内・海外へ出稼ぎを出す土地で、明治期に入ってもみるべき近代工業の発達はなかった。しかし広島には、軍事的な立地条件と過剰労働力があつた。かくして広島は軍都として指定さ

れ、建設された。帝国陸軍の一師団・五連隊・運輸部・三支廠が配置された。軍事の機関・施設・事業は、資本と労働力を招いた。土木工事の入夫、(兵器・被服・糧秣)支廠の職人、軍調達の商品の製造業者や商人が、広島に集まった。

この過程でA町が、周辺農村・都市から流入し、また都市内で環流する下層労働力のプールとして膨張していった。

このように俯瞰される広島地域性を背景に、また今日の広島を射程に入れ、さらに都市下層および都市部落(A町)の展開を念頭に、近代の経緯を整理すると、下図のようになる。図は、近代広島都市部落研究という本稿の主題追究のための整理枠である。

本稿では、明治から現在(戦後)に至る時間を「近代」と呼ぶ。その上で近代を三区分する。まず、明治維新一八六七年から第二次世界大戦敗戦の一九四五年までを「近代Ⅰ期」と呼ぶ。近代都市の発端から大都市としての成熟に至る近代Ⅰ期は、本来、さらに下位区分される。次に、敗戦から通称「原爆スラム」(基町)の再開発事業の完了宣言が出された一九七八年までを「近代Ⅱ期」と呼ぶ。戦災都市復興の時期である。そして一九七八年から現在までを「近代Ⅲ期」と呼ぶ。これは、石油

危機を転点とするポスト高度経済成長長期に照応する。最後にこれら三期に、都市(表記/目標/都市下層(人口/空間)/都市部落(就労/空間)を整理・対照させる。以下、この枠組みに準拠して、広島・都市下層・都市部落の史的展開の基本を特徴づける。

【図】都市広島近代史

		近代Ⅰ期 1867～1945年	近代Ⅱ期 1945～1978年	近代Ⅲ期 1978年～
広島	表 記	広島	ヒロシマ	ひろしま
	目 標	軍都の形成	平和都市の建設	国際都市の飛躍
都市下層	人 口	農村人口の流入	罹災人口の環流	流動人口の環流
	空 間	貧民窟/木賃宿 朝鮮人集住区	闇市/スラム/ 朝鮮人集住区	朝鮮人集住区/ 流動的下層
都市部落	就 労	食肉・皮革/都 市雑業	食肉・皮革/失 対/日雇い	サービス/現業 /日雇い
	空 間	拡張/貧民窟	回復/スラム	縮小/低所得区

## (三)近代Ⅰ期

「二」軍都「広島」は戦前期の一八八九年に、面積二七・〇平方キロメートル、二三、八二四世帯、八三、三八七人であった「広島市、一九九五、一八頁」(3)。この時期、「聖戦」遂行の目的を以て軍部主導の都市計画が進められた。道路整備、橋梁架設、上水道敷設、電車・鉄道敷設、港湾・河川埋立て等の都市改造が行われた。軍関係の施設・機関のため土地接収が行われ、接収面積は旧地域の二〇%に及んだ「日本中国友好協会広島支部、一九九〇、三頁」。これらの事業は、大量の労働力を需要した。同時に、軍需関連の軽・重工業が興った。資本が集まり、労働市場が拡大した。その結果、広島は商業・教育・文化の中核都市となった。

「二」都市機能が集中し労働市場が拡大するにともない、周辺農村・都市の過剰人口が流入した。また数次にわたる町村合併によって、市域が拡張された。都市が産業化するにともない、階層および空間構造が分化し、都市下層が出現した。そこに農村・小都市の困窮者がスキッド(滑落)した。市内に貧民窟・木賃宿が散在した。一八八九年に、困窮者救済の広島市救助規則が施行され

た「広島市、一九八九、一二二頁」。一九二五年に、市立の無料宿泊所が建てられた。一九二四年に、警察は四八軒の木賃宿(自由労働者の宿泊者延二一、五〇〇人)を数え、一九二七年に六一軒の木賃宿を数えた「広島市議会、一九八六、六三三頁、七五二頁」(4)。三年間に一三軒もの増加である。当時の新聞や雑誌は、広島の貧民窟および木賃宿の「探検」記を掲載している「中国新聞社、一九一三・六・一四〜一八」。「広島社会事業協会、一九二七・二・五、七五〇〜七六五頁／一九二八・一・一、七八九〜七九二頁／一九二九・一・一、七九二〜七九八頁」(5)。一九一八年に、広島市の最困窮者は一、六九九人であった「雲備日日新聞社、一九一八・六・二八」。一九三〇年九月に、失業登録者は一、五七五人で、内、日本人八四〇人、韓国朝鮮人七三五人であった「広島市議会、一九八三、七九九頁」。これらは行政に「認知」された数であり、実際の困窮者や失業者数はこれをはるかに凌駕したであろう。

大正・昭和(初)期、河川改修、港湾埋立、鉄道敷設工事、造船・機械・鉄鋼・被服等の工場、荷役等に韓国朝鮮人の出稼ぎ者が入った。彼らは、市内の工事現場、工場周辺、河川敷の飯場や簡易住宅(バラック)に集住した。広島県で一九二〇年に一、一七三人の韓国朝鮮人

「広島市、一九八三、三二二頁」(6)を、広島市で一九三四年に三、四四二人の韓国朝鮮人「在日本大韓民国居留民団広島県地方本部、一九八四、三二頁」、一九四五年に五二、〇〇〇人(推定)を数えた「広島県朝鮮人被爆者協議会、一九七九、二五一頁」(7)。とくに三菱重工の工場周辺には、三、〇〇〇人もの徴用労働者が集住したという「山代巴、一九六五、四頁」。これら韓国朝鮮人の集落も、都市下層を形成した。

「三」近代広島市の都市下層の一面をなすのが、都市部落であった。その実態は(一部)貧民窟や木賃宿に重なる。大正期の『中国新聞』で、三大貧民窟の中に市東端の被差別部落とともに、A町が数えられた「中国新聞社、一九一三・六・一四」(8)。またA町の木賃宿の「探検」記が掲載された「中国新聞社、一九一三・六・一八／一九／二一」(9)。明治期、A町は膨張と拡大の時期であった。人口は一八七一年に八八九人だったところ、一九一七年に四、〇五〇人、一九三三年に五、六九三人に膨張した「ふくしま文庫、一九九二、三六頁」(10)。近代広島市の労働市場の拡大とともに、周辺農村・小都市の人々が、姻戚・縁者・同郷者を頼ってA町に流入した。また広島市内の生活困窮者や韓国朝鮮人が環流した。A町「本通

り」の商家や周辺農家が借家を建て、そこへ流入者が入った(11)。A町の地域空間が広がった。A町は幕藩期の「革田部落」に起源をもった。同時にA町は、周辺地域から流入した人々による近代部落でもあった。一九二五年、現住地に本籍を置く人口比率は、市全体(一九〇、九三七人)で七九・七%であった。他方A町(三、七〇二人)は四五・九%であった「広島市議会、一九八三、一一一頁」。ここからも、A町がいかに流入者の町であったかが分かる。A町は、人口移動が激しい。名前の異姓率が高く、住民の出自が容易に分からないという。

一応同和地区というのは、この一団なら一団がですね、どういう苗字でいやどこどこじゃろうという分かっていわれるくらいですが、ここでは絶対それが分かります。

明治以降は軍都として近代化のために各地からおいでんだった。どこも各地から来てるわいという点はあるんですけども、ここだけは孤立してあるわけですね。この町内ではあなたはどこの出身ですかということは聞きませんからね。(12)

A町の部落産業である食肉・皮革は、明治期に入って

本格化した。一九〇五年に、広島畜産株式会社が創業され、その屠場がA町に開設された。一九〇九年に、それが市営となった。一八八六年、松本という人がA町に製革場を創業した〔広島県立図書館、一九八六〕。この時期を起点としてA町の食肉・皮革が発展していった<sup>(13)</sup>。

市営屠場での成牛の屠殺頭数は、一八九四年に八、〇六二頭、一九一〇年に一三、〇二二頭、一九二〇年に一八、七一一頭と増加した〔広島市議会、一九八三、三二四頁〕。この頃、A町内に貧富の差が生じ、階層分化が進んだ<sup>(14)</sup>。

この地域が「細民の巣窟」などと呼ばれるいっぽう、(大正期には―引用者)四、五万円から数十万円の財産を有する一〇人内外の「豪商」があらわれている〔天野卓郎、一九八四、二五〇頁〕。

明治期のA町の仕事として、「職業ノ主ナルモノハ屠夫、革製造、獣肉行商、車夫、日雇稼、靴直シ、下駄の直、及雑商ナリ又副業トシテハ竹皮下駄麦桿真田ヲ営ムト雖概テ下等ノ職業ナルカ故ニ随テ収入モ多カラス全戸数ノ三分ノ一強ニ所謂其日暮シノ細民ナリトス」と記す資料がある<sup>(15)</sup>。一九二三年／一九三四年時点の仕事として「製綿、足袋用甲馳、獣皮骨化製、缶詰、骨釘、鉄工、

ボール紙、石油詰替、製水、製材」ともある<sup>(16)</sup>。A町古老の聞き取りを収めた書には、戦前期の仕事としてこの他、大工、船乗り、馬喰等があった〔広島県部落解放運動史刊行会、一九七三〕。

またA町の仕事は、軍隊との関わりが大きかった。軍隊の施設・事業の建設・土木関係の仕事だけでなく、革製品を納める、古靴が払い下げられる(リサイクル)、軍隊に新しい藁を納めて馬糞や藁(肥料)を引き取る〔同書、一九七三、九一頁〕、糧秣支廠の屠場・缶詰(牛肉)関係・被服支廠の皮革関係の職人になる等があった<sup>(17)</sup>。

(A町は)軍都としての寄せ場いうんですか、軍部との関わりもありましょうし、市内のいろんな関わりもありましょうし、軍を支えるいろんな要員もいったでしょうし、それに関わって業者も入ってきた。食肉とか化成とか皮革とか<sup>(18)</sup>。

しかしA町の生活は厳しかった。A町は貧民窟と呼ばれ、木賃宿もあった。当時の貧困と被差別の様子は、古老の聞き取りに綴られている〔広島県部落解放運動史刊行会、一九七三〕。軍隊の兵士の余った飯(残飯ではない)が払い下げられた〔同書、一〇二頁〕。芸妓に身売

りする女性もいた(19)。アメリカに出稼ぎに出る人もいた(20)。困窮してA町へ入った人々は、もともと生活資源をもたなかった。人々には不安定就労しか途がなく、失業や不況や事故に遭うとたちまち極貧状態に陥った。木賃宿を寄せ場として滞留する放浪者もいた「中国新聞社、一九一三・六・一八」。一九一八年八月一日に、米価の暴騰に怒った困窮者らが米穀商に米の廉売を要求して詰め寄った。米騒動である。A町でも八〇〇人が繰り出した「広島県立図書館、一九一八」。一二日、騒動は全市で五、〇〇〇人に膨れ上がった。騒動は一三日まで続き、騎兵・憲兵が出動し、A町も包囲された。この出来事も、A町住民の困窮を物語る一端である。

A町住民はすでに一九〇七年に、生活改善・困窮者救済のための自助組織を結成していた。そして米騒動を契機に一九二三年、県内の「きょうだい」とともに広島県水平社を結成した。住民の解放運動は、融和的な生活改善運動から訣別した(21)。

〔四〕近代I期の都市部落・A町(の人口・仕事)の特徴は、次のように要約される。軍都広島市の労働市場の拡大にともない、周辺の農村・小都市から人口が流入した。A町に困窮者が入り滞留した。そして流入者は家族

・姻戚・同郷者を呼び寄せた。またA町は、市内困窮者の環流点となった。かくしてA町が膨張した。

A町の労働市場は二つの部分からなつた。一つ、食肉・製靴・製革の部落産業である。これらは明治前期に本格化した格、おおむね事業体は零細で、経営は不安定で、周辺に多くの潜在的失業者を抱える形をとつた。二つ、工夫・大工・人力車夫・雑商等の「都市雑業」である(22)。軍都としての都市改造・商都としての経済興隆は、膨大な労働力を需要し、A町にその下層部分が集住した。A町はいわば寄せ場の機能を果たした。

#### (四)近代II期

〔一〕一九四五年〜七八年の「ヒロシマ」は、「平和都市」建設を掲げての戦災復興の時期であった。一九四四年に面積六九・三平方キロメートル、八〇、一一五世帯、三三六、三八三人を数えたが、原爆投下後の一九四五年には三三、二七二世帯、一三七、一九七人に減つた「広島市、一九九五、一八〜一九頁」。その後、人口が戻つた。さらに一九七〇年代の町村合併で、一九七八年には市域が六七五・一平方キロメートルに広がり、三一五、四三三世帯、八七一、六〇三人に膨張した。一九四



五年にすでに、市会に戦災復興委員会が設置され、戦災復興が始まった。爆心地・基町の第五師団跡地が市に開放され、東半分が「官公庁施設」に、西半分が「公園用地」とされた。一九五二年に、広島平和記念都市建設計画（建設省）ができ、平和記念公園、平和大通り等の中心部の都市改造指針が決まった。一九五三年、広島・呉臨海工業地帯総合開発計画ができ、工業都市としての離陸がめざされた。

「二」原爆で壊滅した戦後広島に、新たな都市下層が形成された。四散していた人々が無一文で市内に戻った。引揚者や新たな流入者が増えた。街頭に「浮浪者」や「原爆孤児」が起居し、市内全域に簡易住宅が建った。市内各所にスラムや闇市が出現した<sup>2)</sup>。基町に応急住宅・引揚者住宅が建ち、困窮者が入居した。戦前すでに国が買収していた太田川河川敷に疎開先からの帰還者・引揚者・市内立退き者・韓国朝鮮人が流入した。結果、そこは巨大なスラムとなった。人口流入の原因は、河川敷が国有地のため占拠・居住しやすく、都心に近く就労しやすく、河川敷のため空間的に密集居住ができたからである。爆心点の相生橋から三篠橋東詰の約一キロメートルの相生通りは「原爆スラム」と呼ばれ、復興事業の土地区画

整理による立退き者を含め、最大九〇〇戸（県都市計画課調べ）、一、一三五世帯が住んだ「山代巴、一九六五、二頁」。その内一七五世帯、約六五〇人が韓国朝鮮人であった（西警察署基町派出所調べ）。このスラムが、一九六八年〜七八年の基町地区再開発事業とともに漸次縮小・消滅していく。

戦後広島で韓国朝鮮人の社会の新たな展開をみた。戦前に五二、〇〇〇人〜五三、〇〇〇人といわれた韓国朝鮮人の多くは、祖国の解放とともに帰国した。在市の登録人口は、一九五〇年一四、六三四人〔広島市、一九五一、一三頁〕、一九五五年一五、五六六人〔広島市、一九五五、二〇頁〕、一九六〇年一六、一八二人〔広島市、一九六一、一八頁〕、一九六五年一六、八三五人〔広島市、一九六六、二〇頁〕、一九七〇年一七、二八五人〔広島市、一九七一a、三二頁〕と漸増していった<sup>2)</sup>。次のような経緯で広島に留まる者も、少なくなかった。

終戦直後、朝鮮に帰ろうと思ひ、家財道具一切を売り払って田舎から出てきた。ところが、輸送船が機雷にふれて沈没したという話をきき、しばらく様子をみることにした。三年間、江波町から南観音町と知合いの家を転々として帰国の日を待った。：呉一家も、遂

に帰国をあきらめ、二十三年からこの相生通りに小屋を建てて住みついた「同書、三〇四頁」。

韓国朝鮮人の集住地は、南観音をはじめ旧軍需工場の周辺地域（小家屋）、基町払い下げ地（簡易住宅）、太田川河川敷（簡易住宅）等であった。後に払い下げ地と河川敷の人々の多くは、立ち退いて公営アパートに入った。一九四九年、韓国朝鮮人の職業は無職二、六七二人、学生（学齢期の子ども）六一四人、土木四八四人、工員一〇八人、古物商五九人、「労務者」五四人、仲仕五〇人、商業五〇人、運転手四一人、飲食業二七人、事務員二六人、その他一七六人、不明二四人で、計四、三八六人であった「広島市、一九五〇a、二四頁」。人々の職業的地位の低さはあきらかである。

「三」被爆直前、A町人口は二、五五八世帯、六、〇三七人、一、五五〇戸であった「金崎是、一九八二、一六頁」。原爆の犠牲は即死約六〇〇人、負傷者四、八〇〇人に及んだ（家屋全壊九〇％、半壊一〇％、家屋消失七〇％）。A町住民は戦時中、疎開で頼れる先が少なく、約五〇戸が疎開しただけであった「同論文、一七頁」⑤。ゆえに爆心地からの距離（一・五〜二・五キロメートル）

ル）に比し、人的な被害（死亡・負傷）率が高かった。被爆後約五〇％が太田川河川敷に留まり、残り五〇％は半年以内にA町へ戻った。ここにも、A町住民が疎開先に存分に頼れない（被差別の）事情があった。その後河川敷に疎開者・引揚者・困窮者・韓国朝鮮人が流入し、人口が膨張した。一九五一年に四、二〇三人「広島市、一九五二、二六頁」、一九五九年に九、一四九人「大橋薫他、一九九一、九三頁」⑥、一九七一年に八、一八八人「広島市、一九七二b」⑦、一九七五年に八、六四四人「ふくしま文庫、一九九二、三六頁」であった。一九五〇年代、原爆で減った人口がたちまち急増した。

戦後、A町の地形と景観が変貌した。一九三二年に始まり一九四四年に中断していた太田川改修工事は、一九五一年に再開された。立ち退き住民の居住権・生活権を求めた激しい闘いが起きた。そして工事は、一九五四年に完工した。一九六〇年〜六二年、平和大通り延長建設および都市区画整理事業が、これに続いた。このなかで立ち退き住民は一部町外へ出て、他の人々は公営・公団のアパートに同居した。

もともと生活資源が乏しい上に原爆で壊滅したA町で、生活再建は容易でなかった。最大の困難は、部落産業や軍関係の仕事が消滅したことであった。A町は戦後ふた

たび、広島市の都市下層として出発した。一九五〇年に、調査対象者二、〇三九人の職業は、靴関係一七・五％、食肉関係一〇・六％、物品販売・飲食業一八・一％、事務・店員一五・七％、工員・技術者七・五％、公務員・自由業五・九％、自由・日雇労働者八・九％、その他・失業者八・一％、無職者七・六％であった〔広島市、一九五〇b〕。これをまとめると、靴・食肉関係の部落産業の仕事に就く者（物品販売・飲食業も含めて）が二八・一％、事務・店員、工員・技術、公務・自由業の被雇用者が二九・一％、自由・日雇、失業・無職が二四・六％であった（このなかの事務・店員・工員は、おおむね零細な事業所で、公務員は現業職であった）。すなわち大部分の職種が、低位で不安定な仕事であった。失業対策事業就労（以下、失対）登録者は、一九五三年に六八四人〔記念誌編集部、一九七四、四三頁〕、一九五七年に七四七人に及んだ〔ふくしま文庫、一九九二、二四頁〕。これは、A町稼働人口の四〇％に相当したという。一九五〇年、生活保護の被保護・要保護世帯は一六・九％で、これは市全体の五・〇倍であった〔大橋薫他、一九九一、一七三頁〕。

一九六七年に、調査対象者二、〇五九人（世帯主）の職業は、皮革関係六・七％、食肉関係九・〇％、物品販

売・サービス業八・四％、経営・事務・工員・看護婦二〇・二％、公務・自由業八・六％、運輸関係四・五％、失対・単純軽作業二一・三％、その他・無職一七・一％、不明四・二％であった〔広島市、一九八四、三二九頁〕。部落産業（食肉・靴・皮革販売やサービス業を含め）が一五・七％、被雇用者が三三・三％、失対・無職が三八・四％である。分類が異なり、また景気変動が影響するので厳密な比較はできないが、一九五〇年と比べて、部落産業関係の仕事が減り、失対・無職が増え、次いで被雇用者が増えた。すなわち部落産業が縮小し、その分、失対・無職の不安定層と被雇用層に分化した。一九七〇年代には、この過程がさらに進行した。大手の機械製靴・合成靴が進出して製靴業が衰退し、和牛が減少し輸入肉・加工肉が進出して食肉産業が縮小した。これらの親方・職人・徒弟は、製靴・皮革および食肉関係の産業を見限り、工場労働者・日雇い・現業職等に転職していった。

〔四〕近代Ⅱ期の都市部落・A町（の人口・仕事）の特徴は、次のように要約される。原爆で一旦外に出た人々は、まもなく戻った。そこへ引揚者・市内困窮者・立退き者・韓国朝鮮人の流入が重なった。人口は膨張し、

太田川河川敷に簡易住宅が密集した。そして太田川改修・都市区画整理とともに、簡易住宅がクリアランスされ、人々は町外に出るかアパートに入居していった。

広島は、戦災復興とともに商工業都市として再興した。しかしA町は、元来部落産業以外に主たる仕事をもたず、そこへ多くの人々が入るなか、零細商工業の従業員、夫対、日雇い、失業者・半失業者が滞留するに至った。その後一九七〇年代、製靴業が衰退し、食肉産業が縮小した。その結果、職人・徒弟が減り、現業職・日雇い・生活保護に転職していった。他方、広島経済が離陸するにともない、建設土木・製造業を中心とする被雇用層が漸増していった。いずれも人々は、戦後都市の労働市場の下層部分に組み込まれた。A町は、これらの人々のプールとなった。

### (五)近代Ⅲ期

「一」一九七八年に基町再開発事業が完了し、広島は広域経済都市および「国際都市」をめざす「ひろしま」に衣替えした。一九八〇年に、広島は政令指定都市になった。一九八五年には七三七・〇平方キロメートル、三八四、〇八二世帯で、人口は一、〇三八、一九八人に

達した〔広島市、一九九五、一九頁〕。この時期、まず都市再開発が進んだ。一九九四年のアジア大会も誘因となり、都心再開発・郊外再開発・交通体系整備等の大型公共工事が行われた。県外から労働者が流入し、建設・土木の労働市場が拡大した<sup>30)</sup>。次に、広島経済圏が広域化した。高速自動車道（中国道、山陽道、浜田道）が整備され、広島新空港が開港した。通勤圏が広がった<sup>31)</sup>。最後に、建設・土木業の膨張と同時に、広島産業構造がサービス経済化した。産業別就労者比で、一九七〇年に、第二次産業三四・五%、第三次産業六〇・二%であった〔広島市、一九九三a、一一頁〕。一九八〇年に第二次産業二九・七%、第三次産業六七・三%であった〔同書、一一頁〕。一九九〇年に、第二次産業二八・七%、第三次産業六八・七%であった。第二次産業比は減少し、第三次産業比は増加した〔同書、一一頁〕。とくに卸・小売・飲食、サービス、金融・不動産等の業種の増加が目立つ。サービス経済化は新たな職種を創出した。そして一方で少数の専門職、他方で多数の不安定就労層という、新たな階級・階層分化を生んだ〔サッセン、一九九二、一九八〜二〇一頁〕。

「二」近代Ⅲ期、広島産業の都市下層も変貌した。大型公

共工事の波が収束し、建設・土木の労働市場が縮小し、その一部が都市下層に沈殿した。またサービス経済化にともなう不安定就労層の下層部分が、都市下層に沈殿した。広島駅・通称「ドン」(大須賀町)・宇品港職業安定所前の日雇労働者の寄せ場が縮小した。「ドン」で毎朝平均四〇人〜五〇人の日雇労働者が集まる「西日本越冬実行委員会交流会」、一九九一、一九九二。これが、アジア大会景気の頃は二〇〇人〜三〇〇人が集まった。また野宿者が、広島駅界隈・中央公園界隈・平和公園界隈に可視化した。景気や季節による変動は大きい、その数、市内平均で四〇人〜五〇人という「同書、四一頁」。

広島で、日雇労働者や野宿者等の流動的な下層民はまだ多くない。しかし経済停滞及び経済構造の変容のなか、この数は確実に増えている。

広島市の韓国朝鮮人(登録者)は、一九九四年に九、七二五人で、近年微減傾向にある<sup>32)</sup>。在広島の外国人に占める韓国朝鮮人の比率は、低下している。それは一九九二年に七〇・四%、一九九三年に六七・二%、一九九四年に六七・一%であった「広島市、一九九三b、二九頁」「広島市、一九九五、二九頁」。韓国朝鮮人の集住地域は、西区(南観音町、A町)、中区(基町)を中心に市内に点在する。A町で、韓国朝鮮人の人口比率は全町

人口の一二%という<sup>33)</sup>。いずれの地域も韓国朝鮮人の在広島の史的経緯を背景にもつ。韓国朝鮮人の職業等に関する資料は入手できておらず、あれこれの情報からの全体像を推測するしかない<sup>34)</sup>。韓国朝鮮人の仕事は、建設・土木業、飲食業、販売業、サービス業が多い。零細な事業所が多く、就労条件は厳しい。韓国朝鮮人はおおむね、親族・知人の「同胞」ネットワークを介して就労する。家族・親族従業員、臨時雇い・日雇いと不安定な就労状態にある者が多い。また韓国朝鮮人のなかで、階層分化が進行しつつある。その底辺部分が都市下層に位置する。

近年、広島に新来外国人が増えている。都市の国際化現象である。「韓国人または朝鮮人」を除く外国人登録人口は、一九九二年に四、二三七人、一九九三年に四、七九四人、一九九四年に四、七六五人であった「広島市、一九九三b、二九頁」「広島市一九九五、二九頁」。この他、未登録の外国人が多数いる。登録人口の内、アジア・南アメリカ出身者の大半が新来外国人である。中でも中国人・ブラジル人・フィリピン人が多い。在広島の新来外国人の法的地位・仕事等に関する資料を入手できておらず、あれこれの情報から全体像を推測するしかない。中国人に学生、ブラジル人に企業研修生・出稼ぎ者、

フィリピン人にエンターティナーが多い。東京や大阪の新来外国人調査によれば、新来外国人のエスニシティが多様化し、仕事が多様化し、集団内で階層化し、また個人レベルの仕事・生活で階層化しつつある<sup>(35)</sup>。新来外国人の底辺に、未熟練・不安定の作業員・工員・店員や日雇労働者が位置づく。近年、東京では公園等で野宿する新来外国人も現れている。人口規模は小さいとはいえ、広島の新来外国人の動向も、全国の趨勢に照応してはいまいか。野宿する外国人の報告はないが、不安定就労の作業員・工員・店員・日雇労働者は多い。その被差別の立場ゆえ、都市下層に属する新来外国人は少なくない。

〔3〕現在のA町の様子はどうか。以下報告書「広島市、一九八八」および「広島市、一九九三a」に依って、A町の全体像（の一端）を描く。ただし煩雑になるので、逐一の注記は省く。A町の世帯・人口は一九八五年に二、二二一世帯、五、八七九人、一九九〇年に二、〇三〇世帯、四、九七六人であった。近年のA町の人口動態について、次の特徴が指摘される。一九八五年〜一九九〇年に、まず人口が減った。次に人口は一五歳未満および三〇歳代以上減り、六〇歳代以上で増えた。世帯構成では一人世帯率が三六・三％で、四・六％

の増加である。ここに若年層の減少・高齢層の増加という人口の二分化傾向が指摘される。別資料によれば、一九八〇年〜一九八六年にA町に転入した人三、二二二人の内、六五・一％がA町を含む区内からの転入であった。「ふくしま文庫、一九九二、二二三〜二三五頁」。同じくA町から転出した人三、六八九人の内、六八・七％が同区内への転出であった。すなわち若年層を中心とした人口移動は、区内という近接空間での移動でしかない。ここに、人口移動を空間的に制約する差別の構造がある。ちなみにA町の混住率は、一九九〇年に二六・三％とされる「広島市、一九九一、一三頁」<sup>(36)</sup>。A町在住の韓国朝鮮人が二％というから<sup>(37)</sup>、非対象（つまり非出身）の日本人は、じつに一四％余ということになる。人口の流動性が高いA町において、非出身者人口の率がいかに低いかが分かる。ここに今日なお広島で、A町を被差別の町として空間的に凝離する力を見る。

A町で一九八五年〜一九九〇年に、就労状態にある人が微減し、非労働力が微増した。これは人口の高齢化に照応する。完全失業率は二・〇％減って三・二％である。その率は近代Ⅱ期より大きく減った。しかしそれでも市全体の二倍以上である。次の就労実態から推して、半失業率も高いものと推測される。産業別の就労では、一九

九〇年、建設業一三・五%、製造業一一・二%、卸・小売・飲食業三六・二%、サービス業二四・五%であった。一九八五年に比べ、サービス業が増加した(プラス三・八%)。市全体に比べ、卸・小売・飲食業の率が高く(プラス八・六%)、製造業の率が低い(マイナス六・〇%)。サービス業の比率は、市の平均に等しい。A町住民の就労は第三次産業に傾斜している。なお公務員が二・一%いるが、ほとんど現業職である。職業別の就労では、一九八五年、専門・管理職八・一%、事務職一四・七%、運輸・通信職八・五%、技能・労務職三六・三%であった。市全体に比べ専門・管理職が八・九%、事務職が七・三%低く、運輸・通信職が四・二%、技能・労務職が九・三%高かった。現場の仕事の割合が高く、職業階層の低位性はあきらかである。また専門・管理職、事務職も、それらの中身が検討されなければならない。

A町住民の生活水準は、一般に低位であるといわれる。本稿で住民の所得・消費水準を知る資料をもたない。行政はこれらの資料を公開していない。わずかに完全失業率が高いこと、就労条件が不安定であること、生活保護率が高いこと等の事実から、生活水準の低位性を推測する他ない。A町の完全失業率は市平均の約二倍で、生活保護状況は一九八二年〜一九八七年の年平均で二二・〇・

二世帯、三五〇・八人であった「ふくしま文庫、一九九二、二二五頁」。保護率は一九八八年に六〇・四%で、市平均の約八倍の高率であった。

〔四〕近代Ⅲ期の都市部落・A町(の人口・仕事)の特徴は、次のように要約される。A町人口の流入は大きい。一九八〇年〜一九八六年に年平均四六〇・三人が流入し、五二七・〇人が流出した例。A町への流入には、外へ出ていて戻った人やその縁者が含まれる。その多くは近接空間での移動である。

A町は広島社会の下層の人口還流の結節点である。A町には建設・土木、サービス関係の臨時・日雇い仕事がある。安い貸間やアパートがある。下町的なコミュニティがある。市内の就業場所に近い。かくして市内から生活困窮者や不安定就労者が参入しやすい。「傷病」「その他」のケースの生活保護世帯の一〇%は、外からの転入者である「ふくしま文庫、一九九二、二二六頁」。またA町には外国人が多い。韓国朝鮮人が多い。これに新来外国人が加わる。中国人・韓国人・フィリピン人・ブラジル人。この人々がA町へ入る経緯も、同じである。

A町から流出する人々には、まず若年層がいる。A町住民の持ち家・一戸建て率は二六・五%である。後は公

「営・公団・民営のアパート暮らしである。ゆえに若い世代が世帯分離する時、家を出るしかない。流出先の多くが在住区内であることは、先にみた。かくしてA町に高齢層が滞留し、一人世帯が増える。次に、生活水準が上位・中位の富裕層や余裕層がA町を出る<sup>(39)</sup>。この場合、家を新築する土地空間がないという事情のみならず、町を出たいという心情も働いている。

A町住民の就労には、次のような特徴がある。まず部落産業が労働力需要の役をほとんど果たしていない。製靴・皮革業は現役の靴職人二人を除いて、ほぼ消滅した<sup>(39)</sup>。食肉関係は市営の食肉中央卸売市場の職人が四三人で、その他食肉加工業者およびその従業員、焼き肉店まで含めた食肉販売関係の仕事に従事する<sup>(40)</sup>。しかしその数も、以前より縮小した。次に近代Ⅱ期に中心的な役を果たしていた失業対策事業が終息した。生活保護の比重も、なお率が高いとはいえず低下した。最後、卸・小売・飲食業への就労の比重が増加した。これは零細な流通・サービス業分野の事業体（特に食肉関係）が多いA町の実態を反映するのみならず、広島島のサービス経済化に照応する。

以上のような就労の特徴のもと、A町で階層分化が進行する。町から若年層・富裕層が出て、高齢層が残り、

そこへ不安定就労層・外国人が入る。広島の下層人口の環流の結節点としてのA町の位置が、なお機能している。

#### (六) 都市部落の位置

本稿は「近代と都市部落」の主題のもと、A町を事例に都市部落の近代史を俯瞰した。記述は近代を三期に分け、広島および都市下層の枠組みのもと、A町の人口・就労の構造を見た。近代広島の開闢にみるA町の位置は、次のように要約される。

一、A町は、農村困窮者↓戦災困窮者↓下層困窮者と、人口の流動する下層部分を受容してきた。参入が容易な仕事群・安い居住条件・親族や縁者のネットワークの存在がそれを可能とした。労働市場の底辺を担う新たな活力ある人口の受容は、A町および都市広島の活性源をなしてきた。

二、A町は、都市人口の下層部分の社会移動の濾過機能を果たしてきた。A町は、周辺農村・都市（の被差別部落）から流入する人々の空間的な濾過機能を果たした。また広島の他地域から流入する人々の階層的な濾過機能を果たした。



三、A町住民は、部落産業・都市雑業↓失対・建設土木・日雇い↓販売・サービス・労務と、都市の下層労働の中心部分を担ってきた。そして高い失業率と生活保護率を引き受けてきた。

四、A町は、軍需↓建設土木↓労務と、都市広島の労働力需要の調節機能を果たしてきた。A町は、過剰労働力や退役労働力のプールとなってきた。日雇い・失業・生活保護が、これら縁辺労働力の常態であった。

五、A町は近代Ⅰ期に、遍在する貧民窟の核の一つをなした。近代Ⅱ期に、被爆による壊滅から都市部落として蘇生した。近代Ⅲ期に、都市経営の離陸のなか、なお都市下層として凝離・島化されている。

すなわちA町は、近代Ⅰ期～Ⅲ期を通じて、時代ごとに形を変えながらも都市下層に位置づいてきた。近代Ⅲ期に、A町の生活水準が底上げされ、生活保護受給の極貧世帯が減った。しかしA町全体としてなお都市下層に留まっている。

ところでこの史的経緯、すなわちA町を可視的に（近代Ⅰ期、Ⅱ期）また不可視的に（近代Ⅲ期）、都市下層へと凝離してきた都市の構造圧力のなかにこそ、部落差別の現実がある。広島近代都市の形成に始まり脱産業

都市に至る経緯のなか、A町を市域の中心（交通至便にして就労・居住の一等地）にあつてなお周縁に追いやってきた都市の無言の意思こそ、構造としての部落差別にほかならない。

本稿は、都市下層の近代史研究の一つとして、近代都市の形成と展開における都市部落の変遷をみた。そしてそこに自己撞着する近代都市の階級性と差別性を読んだ。本稿は、都市部落および都市下層の近代史研究の序にすぎない。また筆者のA町研究の序にすぎない。仮説の構成と検証の実質は、この先にある。

(1)ゆえに「都市下層」を構成する下位範疇は、時代と社会によって異なる。また中根は、寄せ場労働者の概念規定のなかで、「都市下層」の要件として「被差別性」を掲げている「中根光敏、一九九七、一七〇頁」。

(2)本稿でいう「A町」には行政区としてさらに四町が含まれる。

(3)以下、面積・世帯・人口については同書から。一八九頁。

(4)本質宿の分布は一九二七年に、東警察署管内二四軒、西警察署管内三〇軒、宇品警察署管内七軒であった。

西警察署管内には、本稿の対象地・A町が含まれる。

(5) 広島社会事業協会の資料は「広島市議会、一九八三」

からの重引による。当時、記者たちのスタンスは「変装」して未知の「異界」(貧民窟・木賃宿)を「探検」するという距離にあった。

(6) 国勢調査による。このなかに広島市に住んだ韓国朝鮮人が多く含まれる。

(7) 広島県朝鮮人被爆者協議会が被爆者の証言をもとに行った調査結果である。一九三九年、韓国朝鮮人の日本への強制連行が始まった。その結果、一九四〇年代、朝鮮人が激増した。

(8) 一九〇七年、地区名が川添村からA町へ変更された。

(9) 当時は被差別部落の「赤裸々な」実態描写が、なんの配慮もなく新聞に掲載される時代であった。

(10) 『芸藩通志』に、幕末期に川田村(現在A町)に九三〇人いたとある「広島市、一九七二、二〇五頁」。

(11) A町在住Bさん(七二歳)の話(以下、年齢はすべて面接時点のもの)。一九九三年二月五日。「本通り」の世帯数は、当時から今日まで六五世帯で変わらないという。この世帯および周辺農家の人々がA町の先住者をなす。

(12) 前掲Bさんの話。一九九三年二月五日。このようなA

町形成の経緯ゆえに、住民には「来住者」「仮住まい」意識が強いという。

一八九五年、広島にコレラが発生して市内で一、三〇二人が死亡した「広島市、一九八九、二六三頁」。

その時の仕事で広島県東部(備後地方)から来てA町に住み着いた人々がいたという「A町在住Cさん(八六歳)の話。一九九一年一月二三日」。たしかに、筆者の情報でもA町に県東部に出自をもつ人が少なくない。

(13) いずれも年代は、次の書からとった「広島県立図書館 一九八六」。

(14) 一九一六年、ロシアから一四万足の編上靴の注文があり、大阪の二工場の外、A町にも工場を設置してこの製造にあたるとある「芸備日日新聞社、一九一六・九・一〇」。またこの時、さらに別の一五万足の注文もあった。

(15) 「広島県地方団体及慈善団体事績概要」『近代部落史資料集成』第五卷所収「ふくしま文庫、一九九二、三六頁」より重引。

(16) 広島県工場懇話会「工場法適用工場一覧」「ふくしま文庫、一九九二、五九頁」より重引。

(17) 糧秣支廠にも屠場があり、軍用缶詰が作られた「広島

市、一九七二、四二三頁」。大正期、市内に二〇人を越える缶詰業者がいた「同書、四三二頁」。この仕事にA町住民が関わった。

(18) 前掲Bさんの話。一九九三年二月五日。

(19) 前掲Cさんの話。一九九一年一月二三日。A町を出る時、一旦隣町に籍を移してそこから娼妓になる娘がいたという。同じ話は新聞にもある「中国新聞社、一九一三・八・一七」。当時のA町に対する差別の厳しさがかげがえる。

(20) 前掲Cさんの話。一九九一年一月二三日。

(21) A町は戦前・戦後(の一時期)を通じて広島部落解放運動の拠点(の一つ)であった。差別は厳しく、住民の闘いは激しかった。優れた指導者も多く輩出した。今日なお、A町(住民)の心性にこの誇りの歴史を深く留めている。今、人々は組織を再興し、その闘いを継承しつつある。

(22) 隈谷は、「小工業や零細家内工業の労働者、小売商、サービス業の従業者、職人等の手伝、土建その他の人足、日雇等々」で、近代的賃労働関係とは異なる家長制や擬制的親分子分関係等に支配された生業に就く者を(都市)「雑業層」と呼んだ「隈谷三喜男、一九六七、六三〜六四頁」。

(23) 闇市(自由市場)は、現在のJ R広島駅・横川駅・西

広島駅の周辺、宇品、天満のものが大きかった「広島市、一九四七、二九頁」。一九四六年一月に商店二三〇店だったものが、その年二月には二、〇〇〇店に膨れ上がった。

(24) 一九四九年の政令第三八一号による登録証明書発行を受けた者につき、とある。

(25) 別資料では、調査人員の内、被爆後移転した人一五五人、移転しなかった人一、二一八人、不明七八人とある「広島市、一九八四、二九三頁」。移転しなかった人が八六・三%に及ぶ。

(26) 「大橋薫他、一九九一、一六六頁」より重引。

(27) 「大橋薫他、一九九一、一六六頁」より重引。

(28) 「大橋薫他、一九九一、一七二頁」より重引。

(29) A町在住Dさん(五三歳)の話。一九九二年二月三日

(30) 一九九一年三月、広島新交通システム工事で架橋中の橋げたが落下し、一四人が死亡する事故があった。アジア大会関連の施設・道路の建設ラッシュのなか、労災事故が急増した「中国新聞社、一九九一・九・七」。

(31) 高速自動車道の整備により山口県・島根県・鳥取県から広島への建設・土木工事に日帰りで通うことが可能と

なった。農閑期の農民は、それまでは出稼ぎ形態であった。今、早朝の高速道のドライブ・インは、マイクロバスで広島へ向かう農民の朝食風景で賑わう。  
 (32)ただし、このなかに登録をした新来の韓国朝鮮人も含まれる。

(33)前掲Bさんの話。一九九三年二月五日。

(34)次の書に、丸山孝一による南観音の韓国朝鮮人の集住地区の人口移動・家族・生活・文化の詳細なモノグラフがある。「広島市、一九八三、三〇二〜三九〇頁」。

(35)都市の新米外国人に関する最新の研究に、次の書がある。「広田康生、一九九七」「奥田道大、一九九七」

(36)混住率とは、 $(\text{外国人人口} \div \text{外国人人口}) \times 100$ 、で算出された。この算出方法には批判もある。

(37)次の書に掲載されている表から算出した「ふくしま文庫、一九九二、二二二頁」。

(38)前掲Cさんの話。一九八五年一〇月一八日。

(39)A町在住Eさん(七六歳)の話。一九九五年八月二日。  
 Eさん兄弟が現役の靴職人である。

(40)A町在住Fさん(六七歳)の話。一九九六年一月二二日。

\*本稿を一部とするA町研究に協力いただいたA町の

方々に謝意を表する。

#### 【参考文献】

天野卓郎、一九八四、『大正デモクラシーと民衆運動』

雄山閣

有元正雄・天野卓郎・甲斐英男・頼祺一、一九八三、

『広島県の百年』 山川出版社

馬原鉄男、一九七四、『日本資本主義と部落問題』 部落問題研究所

部落問題研究所

馬原鉄男、一九八二、『日本都市下層社会研究覚書』『部落問題研究』七四号 部落問題研究所

落問題研究

大串夏身、一九八〇、『近代被差別部落史研究』 明石書店

書店

大橋薫・八木佐市・林雅孝、一九九一、『戦後広島市の都市診断』 ミネルヴァ書房

市診断

奥田道大、一九九七、『都市エスニシティの社会学 民族／文化／共生の意味を問う』 ミネルヴァ書房

金崎是、一九八二・八、「被爆者の生活と救援運動」 部落問題研究所

落問題研究所『部落』四二二号

記念誌編集部、一九七四、『西部復興土地画整理事業

(第二工区)誌』

芸備日日新聞社、一九一六・九・一〇、「製靴業者の活

芸備日日新聞社、一九一六・九・一〇、「製靴業者の活

躍 露国大注文其他」『芸備日日新聞』

芸備日日新聞社、一九一八・六・二八、「飢えた貧民

千六百九十九人」『芸備日日新聞』

在日本大韓民国居留民団広島県地方本部、一九八四『広

島民団三五年史』

サツセン・サスキア（森田桐郎他訳）、一九九二、『労働

と資本の国際移動』 岩波書店

杉原薫・玉井金五、一九八六、『大正／大阪／スラム

もうひとつの日本近代史』新評論

隈谷三喜男、一九六七、『日本の労働問題』

中国新聞社、一九一三・六・一四、「梅雨期の貧民窟

雨に泣く悲惨な一廓」（一～四）、『中国新聞』

中国新聞社、一九一三・六・一八、「社会暗黒面の探検

木賃宿通信ⅡA町より」（一～三）、『中国新聞』

中国新聞社、一九一三・八・七、「M町より娼妓志願」

『中国新聞』 九

中国新聞社、一九二一・九・七、「ア大会控え建設労災

が急増」『中国新聞』

中川清、一九八五、『日本の都市下層』 勁草書房

中根光敏、一九九七、『社会学者は二度ベルを鳴らす』

松籟社

西日本越冬実行委員会交流会、一九九一、「西日本越冬

活動報告」 日本寄せ場学会『寄せ場』第五号

日本中国友好協会広島支部、一九九〇、『軍都ひろしま

旧軍施設めぐり』

橋本敬一、一九八六、『芸備の被差別部落』 後藤陽一

・小林茂編『近世中国被差別部落史』 明石書店

広島県朝鮮人被爆者協議会、一九七九、『白いチョゴリ

の被爆者』 労働旬報社

広島県立図書館、一九八六、『広島県部落問題年表 広

島県立図書館 所蔵資料にみる部落問題』

広島県部落解放運動史刊行会、一九七三、『広島県水平

運動の人びと』 部落問題研究所

広島市、一九四七、『市政要覧 昭和二一年版』

広島市、一九五〇 a、『市政要覧 昭和二四年版』

広島市、一九五〇 b、『広島市における部落調査』

広島市、一九五一、『市政要覧 昭和二五年版』

広島市、一九五二、『市政要覧 昭和二六年版』

広島市、一九五六、『市政要覧 昭和三〇年版』

広島市、一九六一、『市政要覧 昭和三五年版』

広島市、一九六六、『市政要覧 昭和四〇年版』

広島市、一九七一 a、『市政要覧 昭和四五年版』

広島市、一九七一 b、『広島市隣保館要覧』

広島市、一九七二、『広島市史』第四巻

広島市、一九八三、『広島新史 都市文化編』

広島市、一九八四、『広島新史 歴史編』

広島市、一九八八、『昭和六〇年 国勢調査結果報告書』

広島市、一九八九、『図説広島市史』

広島市、一九九一、『同和对策の概要』

広島市、一九九三 a、『平成二年 国勢調査結果報告書』

広島市、一九九三 b、『第一五回 広島市統計書 平成五年度版』

広島市、一九九五、『第一六回 広島市統計書 平成六年度版』

広島市議会、一九八三、『広島市議会史 統計資料編』

広島市議会、一九八六、『広島市議会史 社会資料編』

広島社会事業協会、一九二七・二・五、変装記者「市内

木賃宿化け込み探検記」『社会時報』六一一

広島社会事業協会、一九二八・一・一、無料宿泊所主・

下田広次郎「広島無料宿泊所の古い日誌の中から

(一)」『社会時報』七〇一

広島社会事業協会、一九二九・一・一、藤川天洋「広島

市に於ける貧乏原因の実地踏査報告」『社会時報』八

〇一

広田康生、一九九七、『エスニシティと都市』 有信堂

ふくしま文庫、一九九二、『地域民主主義を問い続けて

水平社七〇年と広島のたたかい』部落問題研究所

福原宏幸、一九八六、『都市部落住民の労働生活過程

西浜地区を中心に』 杉原・玉井、前掲書

山代巴、一九六五、『この世界の片隅で』 岩波書店